

蓬萊町だより

日会部 10町化
号 10月
六 蓬萊文
第 6者
成 16年
行 6月
集 6日
編 平発

私説 資長太田道灌の生涯 (その三)

日本随筆家協会々員 上野 静

彼はまた、敬神崇祖の念に厚く社寺、仏閣を建立、再建して人々の往来を齎らし、経済を豊かにした。

旧赤坂の日枝神社、平河大満宮、湯島天神、根津神社など以下数十個所に祀っているのである。

しかし、他方、十年間の争乱で農村は極度に疲弊し、田畑は荒れ果てて物資は欠乏、民衆は貧窮し、唯々、ひとり、江戸の街だけが裕福だった。当然のように道灌は再び、兩上杉、長尾景春や地方の豪族達に大変な羨望と怨恨を買うことになったのである。

某日、山内上杉は道灌に側近の高瀬を使者として送り「江戸城の修復は実は強化拡充ではないか。貴殿に就いては吾々は真意を疑っている。このことに就いて真実を聞きたい。どうかご返答が頂きたい」というニユアンスの申し入れだった。元来、高瀬は道灌に好

意を持っていた。道灌は「後日、文書で回答するといったが高瀬は「口頭で結構です。却つてその方が上杉も納得するに違いない」と容れた。しかし、道灌は文書の返事を押し徹した。樋口、中村の家臣は道灌の一徹を心配した。二人は後難を怖れ、足軽隊や群臣を集め、万一の場合は団結して道灌を守ることを確約、誓い合った。

そして彼ら二人は道灌に注進した。それは江戸城内に多彩な花の木を植樹、戦時は伐採堡壘を築いて敵の攻撃に備え、花の春には観桜会を開催、門を築いて一般民衆に解放、共に楽しみ、歌も唄うというイベントを催す企画を立てると道灌は上機嫌で喜んだ。

早速、足軽隊を中心に(全員が桜、梅、椿、紫陽花その他の美しい花の植樹に汗を流した。道灌は次の植樹にはアノ山吹の娘二人も呼び寄せ、参加させようと考えた。

そんなことを考えていた某日、山吹の娘二人の父、国柄が息、咳きつて入ってきた。「七重、八重を悪党どもが近くのお寺に攫つて入り込み、軟禁している。今の所は無事の方です」と道灌に救出を求めた。

道灌は寺の本堂の前で「俺は江戸城の主、太田道灌だ。お前達七人の中に俺が知っているのが一人いる。出て来い」と油断させ「他の六人も一緒に出て来い。二人の娘を解放せよ」と語気鋭く迫った。七人の悪党どもは「お互

いに顔を見合わせ「その一人は誰だろうか」と仲間同士で疑い始めた。その瞬間の隙だった。道灌は「それ行けと怒鳴ると樋口、中村の家臣と多数の農民が農機具を武器としてドーツと雪崩れ込み、七人を滅多打ちにし、斬殺した。二人の娘は無事解放されたのである。国柄は道灌に心から感謝した。

娘二人も道灌に縋るように泣きジャクリながらお礼を言った。

この時、道灌は「二人の娘を江戸城に連れて行きたい。国柄よ心配するな。俺は城内に娘と一緒に山吹の木を植えたいのだ」二人の娘は大いに喜び、国柄もニコニコと笑顔を見せOKした。

やがて江戸城は時ならぬ夢の桃源郷が色とりどりの美しい花を咲かせて出現した。

娘二人はいそいそと嬉しさに感激し、山吹や色とりどりの花の木を植え込んだ。

道灌は「来春は山吹の花が混じり、更に一段と色彩を添え、一面の美しい花の里になるぞ」と満面に笑みを湛えて洪笑した。

しかし、道灌は心の中で「来春俺はみんなと一緒に美しい花見が出来るかどうか」と一抹の不安が頭の中を掠めたのである。

それは上杉家が口頭で返事をすることを拒否し、後刻、返書で回答すると伝え、それが未だに実行していないからだだった。

無論、道灌には確乎たる信念があったから

だ。道灌は返書を書き綴った。

「上杉家は今まで屢々危機に遭遇した。その克服はあげて私が努力したからだ。上杉家の再興は私の力だった。私の功績はご認識のことと思います」と激越な文章だった。

しかも、上杉家の要求する江戸城修復の実情には一言も触れていなかった。これを読んだ重臣達はみな様に驚き、上杉家の激怒を怖れたのである。しかし、道灌は「当然、この反発はある。実は俺はこの反応が良かった。その上で樋口、中村に俺に忠誠を尽くすもの、家臣団、足軽団を護送船団とし、俺の道灌軍団を守り抜いてほしい」と力説した。

昨今の関東は薄氷の上の表面上の平和だ。京都の足利尊氏將軍、古河公方の足利成氏、長尾景春などの大勢力が政治的思惑で成り立っているのだ。一般民衆は十年戦争で家財道具、財産を失い、田畑は荒れ果てて厭戦気分が充満している。こんな状態は京都も古河も長尾もみんな判っている筈だ。現在の講和状態は不透明だ。薄汚い状況だ。我々はこの汚れた沼の中に美しい花を咲かせたい。これが太田軍団の使命であり、道灌の美学だ」樋口と中村の家臣は道灌の真意を理解し、この返書を届けることを決意していた。返書を読んだ上杉定正は激怒した。当然だった。

この事件は上杉家全員固よりのこと関東一円に伝わり、拡まって行つた。道灌はそれが

狙いだった。彼は関東の薄汚れた泥沼に一石を投じ、これに依つて浄化してほしいという警鐘を乱打したつもりだった。

ところが泥沼は却つて激みを増す一方で泥水者同志で争い合うという状態だった。

道灌は事、志と違い、別の方向に進んで行つた。道灌は思い悩み、憂鬱な日々が続いた。しかし、道灌は怯るむことなく別の角度から関東の浄化を推進してゆくことを考えた。浄化された江戸城の美しさをPRし戦いに疲れ、萎縮した民衆を励ませ、活性化を図ることから始めることを決意した。

わが江戸城は確かに軍略上、重要であるが文化的にも役立つことを宣伝した。

その一環として鎌倉の五山の名僧を招き、江戸城を素材にした多くの詩を作らせた。更に高名な美濃、鶴沼に庵を持つ詩人、万里集九を招いた。集九は美しい江戸城の光景と繁栄、民衆の人情、道灌の人徳等を記録に残した。集九は多数の民衆や重臣達の歓迎に感激、浄華された江戸を賛美した。

道灌は梅の好きな集九の為に城内の梅林に庵を造つて待遇した。集九は喜びに溢れ鶴沼のわが庵に「梅花無尽蔵」と名付けた。

道灌は自慢の城内に拵えた静勝軒で集九を迎えて晩餐会を開催した。

この時、道灌は主君、上杉定正に兼ねて集九と親交があることを知っていたのでこの巨

伝えて「ご光米になりませんか」と誘った。

上杉定正は家臣も伴わず唯一人で江戸城にやつてきたのである。彼は政治と文学を明確に割り切るだけの文学にも明るい男だった。家臣達は親方の返書が激越だったので恐れ、戦き、マサカと思つていた矢先だったので驚くと共に非常に感激、涙を流して喜んだ。それでも定正に就いては心底では警戒心を怠らなかつた。道灌は集九との出会いで色々と心を回らし、反省するところがあつた。「俺は本質的には文学にあつたのかも知れない。偶々、武人として名を高めてしまった。

やはり、俺は文人としてこの道を進むべきだった。さすれば、古河公方足利や両上杉家との関係が丸く納まつていたのかも知れない」と振り返つた。道灌は歌会を通じて文学は高い精神の所産で政治生活などの俗事を持ち込むことは文学の冒涇であり、文学否定の論議だ。寧ろ、文学とは生々しく泥々とした人間の営みを浄化、正しい方向に進めてゆく美しく力強いパワーがあるものだ。これが道灌の哲学だった。道灌は家臣が企画の江戸城は多種、多彩な植樹に依つて四季折々の色どりの花が咲く美観を呈し、平和を謳う人間の里として、民衆にも開城し、共に楽しむ花見の宴を張つた。これに依つて上下共に戦争のない平和で爽やかな生活の出来る国造りに励む事を決意したのだ。 (次号へつづく)

町会活動の概要

平成十五年七月から
平成十五年十二月まで

総務部

- 15年 6/3 蓬萊町会定時総会・懇親会
9/26 後楽園競輪再開反対区民大会
参加
10/1 部長会
10/20 向ヶ丘連合町会長会議
11/1 根津神社 三百年記念準備委員会
11/11 向ヶ丘地区連合町会長会議
11/30 向ヶ丘町会連合祭り。(於、誠之小学校)
スポーツチャンバラ(12町会リーグ戦)で蓬萊町優勝。

婦人部

- 15年 7/9 大観音「千成りほろずき市」に出店手伝い
7/17 資源回収
7/23 根津神社つじ苑除草奉仕。
8/4 日赤奉仕活動「くすのきの郷」
8/24 区防災訓練、日赤奉仕炊き出し。
9/8 敬老てんぷら会、海蔵寺
9/15 敬老記念品お届け、47名
10/1 赤い羽根共同募金
一九四、〇一〇円
ご協力有り難うございました。

11/19 駒込母の会研修見学会(警視庁警察学校・深大寺) 藍原、藤岡 参加

11/20 資源回収

交通部

- 15年 9/20 秋の全国交通安全運動
22〜30日、かねこ前交差点にて街頭活動
11/26 駒込安全協合理事会(駒込警察)

防犯部

- 15年 7/12 町内防犯パトロール
駒込警察の要請で町内全域パトロールを実施。定例役員会の後に行っています。小山・鈴木さんには積極的にご協力頂きパトロールして下さいます。(毎週 月・水・金)
10/12 地域安全運動。町内全域防犯パトロール

防火防災部

- 15年 11/11 防災コンクール 駒込小学校
校庭
選手―藤岡・岩本・池田(朝)
応援―三宅・橋本・本城・坂本・木内・相原・坂本(幸)・名取・宮下 参加

青少年地区対策委員会

- 15年 10/26 東京大学をクイズで探索

文化部

15年 7/10 蓬萊町たより第65号配布。

◎平成十五年度敬老(節目のお祝い)の方々

- 『南部』小野吉次(77)男・飯久保勝孝(88)男
倉田きく(88)女・倉田富雄(88)男
岡田マキ(91)女・吉田 剣(92)男
塚田マツ(96)女・真下みや子(80)女
室屋ハル子(80)女・小川義信(80)男
高岡千代子(77)女・原 富子(88)女
鈴木光(77)女・横山良助(88)男

- 『中部』川西敦子(80)女・益子了介(90)男
小山信正(77)男・廣澤茂子(77)女
清水坂盛(88)男・小山信次(98)男
原ハルイ(93)女・森本 安(91)女
藤田文彦(77)男・河内もと(77)女
武藤秀男(77)男・吉田喜三郎(90)男
林小夜子(80)女・萩田ハツエ(90)女
増田富美枝(90)女・小林義江(80)女
柴島喜代子(80)女・福井三郎(80)男
酒井きよ(91)女

- 『北部』鈴木哲夫(80)男・恩田朝子(88)女
松田 亨(80)男・里見晶雄(88)男
菅野四郎(80)男・山本ヤスエ(80)女
青木静江(88)女・野呂瀬ひさる(91)女
日色吾平(80)男・森田たつ(94)女
高島正義(93)男・豊田スエ(93)女
高村竹雄(92)男・菅谷つや(77)女

訃報

- 青木 武雄 様(八一才) 向丘 2―35―6
高島 道子 様(八一才) 向丘 2―17―2
石橋 忠明 様(六五才) 向丘 2―37―3

『上野 静氏のご逝去を悼みて』

池田 暉

四年前に出た「蓬萊町だより」五十八号から、当地に繋がる楽しい記事を連載して頂いた「上野 静氏」が昨年八月十二日に永眠なさいました。氏は刀鍛冶の名産地として古くから名のある岐阜県の関市で、戦後、市長にも選ばれた素封家の次男として生まれ、長じて東京の早稲田大学に進み昭和十二年卒業「主婦の友社」に入りました。戦災による社の焼失で一時故郷の実家にかえりましたが、その後「理研重工業」に入社し、その職場で奇しくも太田道灌十三代目に当たる太田資博氏と同じ職場に籍をおき、たまたま、太田邸に近い千駄木町に住んでいた事から時には一緒に通動した仲でした。そのことは六十四号の「私説太田道灌の生涯」のなかに述べられています。昭和二十九年に「帝国興信所」(テータバンク)に入り、その間、現住所の弥生町の地に「フジミケークス」という喫茶店を開き、「サクラヤ商品街」を設立しました。そして持前の文才で「日本随筆家協会」のメンバーに成りました。店の名の謂われは当時、日医大坂上から現在の地震研究所へ曲がる辺りから富士山が遠望出来たので名付けたとの事でした。随筆家協会での活動は積極的で協会誌に度々掲載されています。その他にも多数の未発表原稿が在り白伝と

も言える原稿もありましたが奥様に尋ねたところ、残念ながら遺族の手で廃棄されてしまった様でした。ただ小生にとつて辛いであつたのはその中の数稿が残つていてそれを手に入れた事です。お話に依れば、三ヶ月ほど前から体調不良で日医大に入院されていたが、小康を保つていて、前日もたまたまた来た数人の身内と話を交わしておられたとか。数日後に卒寿を迎える寸前でした。

まだまだ、頭脳明晰で話を交わしても大正・昭和のさまざまな話題をロマン豊かな感性で聞き手に伝える正に市井(しせい)の語り部でした。惜しみてもありあまる先賢でした。

心からご冥福をお祈りいたします。合掌

蓬萊句壇

油蟬さ庭にぎはう雨上がり
新宿の夜店懐かし幼き日
秋めくや力みの失せし雲一つ
踊りの輪廻と童手を取りて
本日も嘘も突き出すところてん
新涼や幽霊画展始まりぬ
さみしさの底に転がる青胡桃
紫に唇染めてぶどう狩り
いつまでも平和であれよ空の日や
血糖値良しと云われて梨斤し
満月を飾る火星の幾億年

福山 七重
船橋 小糸
津久井うさぎ
岡田 英子
小野 向雪
彦坂つぐお
池田 南北
福山 七重
船橋 小糸
岡田 英子
彦坂つぐお

月夜に浮かぶ堂宇の鬼瓦
百葉の長と称えて温め酒
頬白の来る一枝を残し置く
意に染まぬ事二つ三つ秋の川
錆釘の折れて傾く秋すだれ
そぞろ寒徒然草を読まぬかな
句碑に添い石路の花咲く大円寺
冷える手にジグソーパズル完成す
橋冷えて伊勢大神へ白き道

青木 沖寿
池田 南北
船橋 小糸
津久井うさぎ
小野 向説
彦坂つぐお
船橋 小糸
小野 向雪
彦坂つぐお

編集後記

明けましてお目出とうございます。この数年、世界中が凄まじい嵐の中にいるようです。そして今年には干支(エト)で見ますと「申年」に当たります。猿と云いますと一般的にあまり良い印象を与えませんが、申年の持つ運勢は決して悪くはありません。確か、豊臣秀吉も申年生まれだったと思えます。彼の生涯が象徴するように挫折とか嫌な事に追い込まれても負けることなく、折節折節に軌道修正して意志強く人生を築いて行く自信と強運に恵まれている年です。今年こそ前向きで頑張りましょう。

編集委員 三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕

青木喜一 池田 暉

